

K52は、歌曲「ダフネよ、汝がバラ色の頬」1768年夏ウィーンで作曲され、12月に「娯楽と稽古のための新曲集」として出版されたのですが、「バステアンとバステイエンヌ」の第1曲のアリア「わが愛しい美しい頬よ」の歌詞を少し変えてピアノ伴奏としたもので、ベーレンライターの新全集には入っていません。そんなこともあって、今回のCD全集にも録音されていませんでした。

K53は、歌曲「歓喜に寄す」も前曲と同じ1768年の秋にウィーンで作曲された小品（4分強）です。K番号については、その後の研究によりK43b(K第3版)、K47e(K第6版)と変更されています。

K54は、ピアノのための5つの変奏曲(6つの変奏曲)ですが、K547a: ヴァイオリンとピアノのソナタのフィナーレにも使われたり、第4変奏が入ってるもの(6つの変奏曲)など諸説あるようですが、このCD全集では5つの変奏曲として演奏されています。

K55~61の7曲は、いずれもヴァイオリンソナタで、順番に第17番へ長調、第18番へ長調、第19番へ長調、第20番変ホ長調、第21番へ短調、第22番変ホ短調、第23番イ長調ですが、今ではモーツァルトの真作ではないと判断されて、K第3版からは外されており、本CD全集にも収録されておられません。

K62は、4分ほどの短い曲で、行進曲ともカッサシオンとも分類されるニ長調の作品です。演奏はニコル・マツト指揮カペラ・イストロポリターナです。

カッサシオン、セレナーデ、ディヴェルティメントあるいは、ノットルノと称される曲群はその演奏機会に合わせた娯楽向きの実用音楽で、ニ長調の作品が多く、1970年代作曲されたものが多いです。また、フィナルムジークという呼び方もあり、それが夜会の最後に演奏される場合につけられたようだ。

K63はカッサシオン(あるいは、フィナルムジーク)ト長調で、各2本のObとHrに弦五部の編成で、全7曲から構成された23分ほどの曲で、フロリアン・ヘイエリック指揮マンハイム・プファルツ選帝侯室内管弦楽団の演奏です。聴いてみると、聴いたことのある旋律もあり、調べると、モーツァルトのディヴェルティメント&セレナード集のCDセットに含まれている曲なのでした。手持ちのサンドール・ヴェーグ指揮ザルツブルグ・モーツァルテウム・カメラータ・アカデミカでは、もっとときびきびした演奏でしたが、私には甲乙つけがたい、いずれも精彩溢れた演奏を楽しむことができました。

K64は、メヌエット ニ長調 です。残念ながらこのCD全集には収録されておられません。YouTubeで、検索したところ見事ヒット、しかも聴きなれた有名な旋律に驚きましたが、これは、K.334のディヴェルティメントの第3楽章が、K64として登録されているので、完全な誤りのようです。また、父の作品ともみなされているようです。

K65は ミサ・プレヴィス ニ短調で、1769年1月にザルツブルクで作曲され2月にザルツブルク大学教会で初演されました。1月初めにウィーンからざるブルクに戻って最初の作品です。キリエ、グロリア、クレド、サンクトス、ベネディクトス、アニュス・デイの6曲からなり、全曲合わせて十数分のミサ曲としては短いものです。しかし短いといっても魅力的な旋律があふれ、とても清々しいものでした。演奏は、ニコル・マツト指揮マンハイム・プファルツ選帝侯室内管弦楽団、ヨーロッパ室内合唱団、ガブリエレ・ヴンデラーAlt、ロベルト・モルヴァイT、マンフレッド・ビットナーBs、イェンス・ヴォレンシュレーガーOrgによる2002年の録音です。

K66もミサ曲「ドミニク・ミサ」ハ長調です。1769年10月にザルツブルクで作曲されました。モーツァルトと仲の良かったドメニク・ハーゲンアウアーがサンクト・ペーター修道院の司祭となって初めてのミサのために作曲されたもので、同月初演されました。前曲と同じく、グロリア、クレド、サンクトス、ベネディクトス、アニュス・デイの6曲からなりますが、グロリアとクレドはそれぞれ7つの部分よりなり、こちらは50分ほどの大曲となっています。演奏は、ニコル・マツト指揮 プファルツハイム南西ドイツ室内管弦楽団、ヨーロッパ室内合唱団、アニャ・ビットナーSp、アンネマリー・クレーマーSp、バーバラ・ヴェルナーAlt、ブノア・ハラーT、マンフレッド・ビットナーBs、イェンス・ヴォレンシュレーガーOrgによる2002年の録音です。

K67~K69の3曲は教会ソナタ第1番変ホ長調、第2番変ロ長調、第3番ニ長調で、オルガンと小さなオーケストラという編成で、ザルツブルクのドームのミサで演奏するために作曲されたものです。いずれも数分の作品で、1772年の作曲とされています。演奏はその後の教会ソナタと同じくボスフーフ・マトウシェクのヴァイオリン、コレギウム・ヤロスラフ・トゥマです。K67はアンダンテの単楽章で、とても優雅な美しい曲です。続くK68アレグロは、生き生きとして器乐的な初期のディヴェルティメントを思わせる旋律で、親しみやすい曲となっています。K69もアレグロで、これまた深淵とした曲となっています。これら3曲はいずれもヴァイオリン2部、オルガン、チェロ・バスからなる編成でオルガンはチェロ・バスを支える通奏低音としての役割で目立ちません。

K70は、レシタティーヴォとアリア「ベレニチェよ～昇る太陽」で、ソプラノ独唱を室内管弦楽団が支える編成で、1769年の作曲とされています。マレイレ・リヒ ディSp、ニコール・マツト指揮ヨーロッパ・チェイン

バー・ソロイスツの演奏です。

K71は、アリア「ああ、もう震えおののこうとは思わぬ」ですが、断片しかなく、この全集でも収録されていません。幸いにも YouTube <https://www.youtube.com/watch?v=nQ1whB1cgp4> で、試聴できますが、90秒過ぎに突然終わってしまいます。

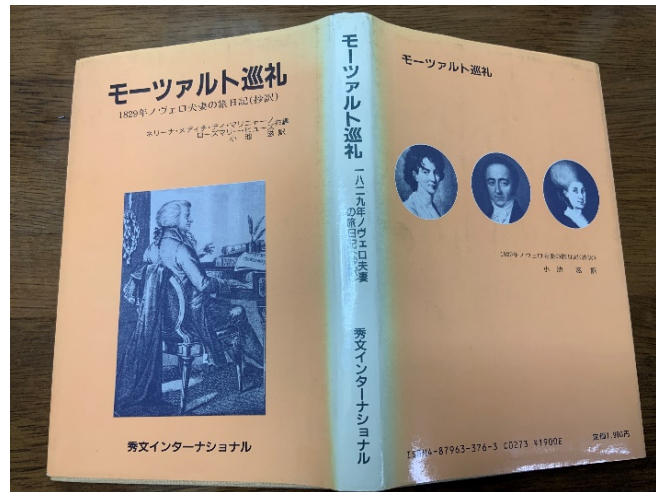
K72は、オッフエントリウム「インテル・ナートス・ムリエールム」＝聖ヨハネ祭の奉献歌「女として生まれた者の中で」ですが、この曲も諸説あるためか、この全集には収録されていませんでしたが、こちらも YouTube で、いくつかの演奏が試聴できます。 <https://www.youtube.com/watch?v=3fIL8qqkO3o>

K73～K76は、交響曲第9番ハ長調、第10番ト長調、第42番ハ長調、第43番ハ長調と交響曲が4曲続きます。

K73は交響曲第9番ハ長調、K74は交響曲第10番ト長調として一般のモーツァルト交響曲全集に録音されています。2曲ともIアレグロ、IIアンダンテ、IIIメヌエット&トリオ、IVモルト・アレグロの4楽章からなる十数分の可愛い作品となっています。作曲年代については諸説あり、第9番はイタリア旅行から帰ってきた1771年夏にザルツブルクで、逆に第10番は1770年ミラノでイタリア旅行最後の作品のようです。先の交響曲と同じくヤープ・デル・リンデン指揮アムステルダム・モーツァルト・アカデミーの演奏です。

K75は、第1回のイタリア旅行から帰って間もない1771年の夏にザルツブルクで作曲されたものです。しかしK76はその作曲由来など、私のつたない調査では不明で、今回の全集にも録音されておりませんが、幸いにも生誕250年の時のフィリップスの全集では、交響曲第42番ハ長調、交響曲第43番ハ長調としてネヴィル・マリナー指揮アカデミー室内合奏団（アカデミー・オブ・セントマーティン・イン・ザ・フィールド）の演奏で、聴くことができました。いずれも4楽章からなる20分足らずの佳作です。

ここまで書いてきた時に、金子雅子会員から、本稿と同じ題名の「モーツァルト巡礼」という書籍をいただきました。ヴィンセント・ノヴェロとメアリー・ノヴェロ夫妻の旅日記から、モーツァルト巡礼部分をNMDマリニャーノとRヒューズによって編集され小池滋によって翻訳されて、昭和61年に秀文インターナショナルより発行されたものです。副題に「1829年ノヴェロ夫妻の旅日記」とあるように、1829年にモーツァルトを求めてイギリスからフランスにわたり、南ドイツを経由してザルツブルクからウィーンそしてザルツブルクに再訪して帰国の途につくという6月から8月にかけて2か月近くの長旅の中での旅日記のモーツァルトや音楽に関する部分を抜粋編集し、さらに訳者が抄訳したものでした。



1829年というのは、モーツァルトの死(1791)の37年後、ベートーヴェン没(1827)後2年、しかもモーツァルト夫人コンスタンツェ(1762～1842)が再婚したニッセン(1761-1826)が書いた「モーツァルト伝」が発刊された1928年の翌年なのです。モーツァルトの死後で、かつコンスタンツェはまだ生きていた時代なのです。前号で、アンリ・ゲオン「モーツァルトとの散歩」が1930年前後の時代ですから、その100年前、モーツァルト死後37年、現在から191年前という事を考えると、この書の時代の貴重なことがわかります。



コンスタンツェとニッセン



ノヴェロ氏の経営するノヴェロ社はドヴォルザークの交響曲第8番の総譜を初出版したことで知られる

(それで、この曲には「イギリス」という愛称がつくことがある)出版社で、音楽への造詣も深く、特にモーツァルトの熱烈な崇拝者で、モーツァルトの一人だけ残された姉(マリア・アンナ愛称ナンネル)が病床でお金にも不自由してザルツブルクに住んでいることを知り、仲間から寄付金を集めて訪問することになったのです。6月26日出発ケルン、マンハイム、ミュンヘン経由7月13日ザルツブルク着4泊。7月17日ザルツブルク発リンツ経由7月21日ウィーン着9泊。7月30日ウィーン発8月3日ザルツブルク着9泊。8月4日ザルツブルク発ドイツ・パリ経由で帰国。

以上が大まかなその旅の日程ですが、オーストリアには20日間滞在したわけで、姉のゾンネンブルク夫人(ナンネル)、ニッセン夫人(コンスタンツェ)に会うことができ、姉には集めた寄付金も渡すことができ、コンスタンツェとは、何度も語り合うことができました。また、当時生存していたモーツァルトの末息子とも何度も会っています。

とても残念なことは、ご当地ザルツブルクでは、当時モーツァルトの音楽はほとんど無視された状況のようで、現在のザルツブルクがある意味モーツァルトの遺産で観光や音楽が盛んになっていることを思うと驚くばかりです。ですから、モーツァルトを偲んで、わざわざイギリスから訪れたノヴェロ夫妻は、彼らにとっても歓迎され、いくつもの記念の品(自筆楽譜など)もプレゼントされています。ル

7月21日にはウィーンへ行き9泊し、宮廷楽長アイブラーに会うことができたが、当時でもモーツァルトの墓碑については、全く不明でした。ウィーンでは、モーツァルト初恋のアロイジア・ウェーバー(当時はランゲ夫人)=コンスタンツェの姉に会うこともでき、ウィーンの人たちのモーツァルト一家に対する冷たい仕打ちを嘆いていたと知ります。その死についても、当時の困窮状態で埋葬場所も正確にはわからない(聖マルクス墓地に埋葬されたことがわかる程度)ようでした。また、かつてモーツァルトに求婚されたのに断ったことを後悔し、モーツァルトに対してとても愛情と愛惜の念にあふれていたと書かれています。

シュタッドラー神父と会うこともでき、ラウエンシュタイン通りのモーツァルトが最後に住んでいた家(現存しないが、当時はすでに別人が住んでいた:現在の同地の写真の左側)も案内してもらっている。さらに、自宅へも招かれ、貴重な遺品を目にしています。

かなりレベルは低かったようですが、ドン・ジョヴァンニの上演を体験してもいます。7月26日(日)には、聖シュテファン教会で、ミサを体験し、さらに宮廷教会ではK194のミサ・プレヴィスニ長調の“初めての素晴らしい”演奏を聴いています。他にも神父の計らいで貴重な体験が語られています。

その後、ザルツブルクに戻り9泊して、帰国の途に就きます。旅日記のモーツァルト関連の部分の抄訳ですが、モーツァルトと直接接した人々との交友の記録ですので、現在のように学者が文献を調べての研究成果でしかない(もちろんそれらは大変貴重な内容ばかりですが)のですが、この書は、直接体験した内容なので、モーツァルトの時代にタイムスリップしたような興奮と感激の連続でした。



さあ、巡礼に戻りましょう。

K77はレシタティーヴォとアリア「何とみじめな私・・・哀れな幼子よ」です。クランダ・ファン・ミラリンゲンのソプラノ、エト・スパンヤールト指揮ヨーロッパ・シンフォニエッタの演奏です。歌詞はメタスタジオの「デモフォオンテ」第3幕・第5場からとられたもので、この曲はソプラノのために書かれています。元になるオペラでは父ティマンテのアリアです。1770年3月初めにミラノで作曲され、同月12日にフィルミアン伯家で初演されました。

K78は、ソプラノのためのアリア「愛しい人よ」という、前曲の4分の1ほどの短いアリアです。

続くK79もソプラノのためのレシタティーヴォとアリア「おお、無謀なアルバーチェよ・・・父君のこの抱擁にかけて」です。これら二つの曲は1770年2~3月にミラノで作曲されたもので、メタスタジオの「アルタセルセ」からのものです。演奏は歌手が不明でニコール・マツ指揮ヨーロッパ・チェインバー・ソロイストの管弦楽です。

K80は私にとって待望の(注1)弦楽四重奏曲 第1番ト長調です。1770年の第1回のイタリア旅行でミラノに7週間滞在したのち南下の途中で1泊したローディの宿で、その日の晩に作曲されました。そこで、この曲

に「ローディ四重奏曲」の愛称で呼ばれることもあります。ただ、この時作曲されたのは、メヌエットまでの3楽章で、現在の第4楽章は1773年にウィーンで、あるいは翌春ザルツブルク追加したものと思われる。とても流麗な第1楽章がアダージョであることにとてもびっくり、伴奏的なVa、Vcの上でヴァイオリンが奏でる魅力的な旋律群に、しばし魅入ってしまいます。

## 私のケツヒェル番号

K80 稲子 宣子

みなさまこんにちは！

K80の稲子宣子(いなこのぶこ)です。

入会してから3年半あまり、モーツァルトについても音楽全般についても、まだまだ知らないことずくめの私ですが、どうぞよろしくをお願いします。

私が自分のケツヒェル番号としてこの曲 すなわち弦楽四重奏曲第1番ト長調 K80を選んだのは、何よりも先ず、この曲が大好きだからです。

私がはじめてこの曲を聴いたのは1988年の夏、場所は留学先の研究所の宿舎でした。

ある晩、仕事からようやく解放され、自分の部屋でほとと息ついたときのことで。

「ひとり暮らしの外国で、ホームシックになりそうになったら、これを聴いてね」

といいながら、友だちが出発前の私に一本のテープを手渡してくれたことを思い出しました。そのテープには、友だちが自分の持っているCDの中から選んでくれたお気に入りの数曲が録音されていたのです。

さっそくそれを取り出し、持参のウォークマンにパチンとセットして再生ボタンを押しますと、やがてこの曲の第一楽章が静かに流れはじめました。するとどうでしょう！

どこかの山奥の湖からあふれ出てきた水がいままでカサカサに乾ききっていた私の心の中を、ひたひたとうるおしはじめたのです。

それはやがて、心の中だけでなく、どうしようもないくらい疲れ果てていた私のからだ全体を深い安らぎで満たしてくれたのでした。

なんとという優しさなのでしょう！

おだやかなアダージョの第一楽章につづいて、早いテンポの出だしからヴォルフガングの得意満面の茶目っ気が顔を出してくるアレグロの第二楽章、なにかを楽しみに待っているようなメヌエットの第三楽章、そしてフィナーレに、軽快なロンドでありながら、なかほどで短調になっているほんのちょっとの間、哀しささえ感じられる第四楽章。

全体で十三分あまりという小品でありながら、四つの楽章は、限りなく変化に富んでいます。

この、モーツァルトにとって最初のクワルテットであるK80は、その自筆楽譜に、

「1790年3月15日夕方7時ローディ」

と、作曲の日とその時刻および場所まで記されているところから、「ローディ四重奏曲」とも呼ばれています。

門馬直美氏の解説によりますと、「13歳のモーツァルトは、父レオポルトとともに1769年12月13日にザルツブルクを出発し、第1回のイタリア旅行に出かけた。その最初の主要目的地はミラノだった。モーツァルト父子は、翌年の1月23日にミラノに着き、3月15日までそこに滞在し、それからイタリア諸都市をめぐる、10月18日以降翌1771年2月4日まで、ふたたびミラノに逗留した。そうすると、父子は、第1回目のミラノ滞在中、3月15日にミラノを出て、パルマ、ポローニャ、フィレンツェなどをめざしたのだが、まさにこの3月15日の夕方近くにローディに到着しているため、この晩の7時にこの最

初の弦楽四重奏曲が書きあげられたというわけである。そして父子は、翌16日にはローディを旅立っている」のです(『モーツァルト大全集第5巻室内楽』音楽之友社編1991年、27~28頁)。

ゴロゴロ道を馬車で移動するため、さぞかしお尻が痛くなったでしょうに、1日の疲れをいやすひまもないほどのせわしない旅の中で、どうしてこんなにも伸びやかで美しい曲が作られたのでしょうか。私は、あらためて「モーツァルトと旅」の不思議さを思い、この不思議さの中にこそ、盡きることのない興味を感じないではいられません。

ところでこの曲の第四楽章は、考証家によりますと、1773年か、あるいは74年の初め頃につけ加えられたものだとのことです。したがってこのロンドを書いたときのヴォルフガングは、第一楽章から第三楽章までを書いたときは違って、すでに一三曲のクワルテットを書き終えており、その年齢も一八歳に近くなっていたこととなります。このことについて、アマチュア・ヴァイオリニストの井上和雄神戸商船大学教授は、つぎのように書いておられます。

「この第四楽章は僕にも、前の三つの楽章とは明らかに別の世界であるように思える。しかし…そうだからといって不自然というわけではない。弾いていて何とも楽しい。そしてモーツァルトがわざわざ三、四年もたってから、この第四楽章をつけ加えたということ、そういう気になったということが、モーツァルト自身この曲をいかに愛していたかを証明しているのではなからうか。モーツァルトがモーツァルトを自覚するのに至った時、もう一度自分の若い時の処女作に手を入れたその愛情を、僕もまた自分のものとしてこの曲を弾きたいのだ」と。

この文章の出典である井上和雄『モーツァルト、心の軌跡—弦楽四重奏が語るその生涯—』(音楽之友社、1987年)は、井上氏が『ブタコレラ・クワルテット』という珍妙な名前のアマチュア弦楽四重奏団で、27年間にわたり第二ヴァイオリンを弾いてこられた経験をとおして書かれたユニークな本です。海老沢敏氏が、「今までに日本語で書かれた一番素敵なお本(本書の帯紙より)と絶賛しておられます。私も、この本にはこれまで評論家によって書かれたモーツァルト論とは少し違った角度からモーツァルトの素顔が生きた生きと描き出されていると思いますので、モーツァルトのクワルテットがお好きな方には是非一読をおすすめします。ただし初版が発行されてからすでに10年以上たっているため、今すぐ入手するのは難しいかも知れません。その場合には、どうぞ私にご一報下さいませ。よろこんでお貸しいたします。ところでこのK80は、わが名古屋モーツァルト協会の演奏会(1995.6.15)でも、地元の弦楽四重奏曲によって演奏されましたので、お聴きになられた方も多いと存じます。CDとしては、イタリア弦楽四重奏団、ハーゲン弦楽四重奏団、アマデウス四重奏団によるものがよく知られていますが、これ以外の演奏によるCDをお持ちの方がいらっしゃいましたらお知らせくださいませでしょうか。そして、もしみなさまの中に、この曲をお聴きになってどんな感じをもたれたかな、ほんのちょっとでもお教え下さる方がいらっしゃいますならば、この曲を自分のケツヒェル番号にしている私にとりまして、とってうれしいことなのですがー。

注1 当会報第3号(1998年12月6日発行)7頁の稲子宣子元会員の投稿で、はじめてこのK80の弦楽四重奏曲第1番を知り、その投稿に魅せられて、はじめてこの曲を聴いたことを思い出しました。20数年ぶりに改めてこの曲を聴き直し、第1楽章のアダージョからその美しさに圧倒されました。以降来年3月号に続く予定です。